

9) オモイグサとギンリュウソウ=思い草と銀龍草

オモイグサはハマウツボ科の一年生寄生植物で、日本の各地に分布する。特にサトウキビ、ススキ、チガヤ、ミョウガなどの根に寄生し、小笠原の島々や台湾などではサトウキビを全滅させることも珍しくない。日本以外では中国、東南アジア、インドなどに分布し、もともと熱帯性の植物である。全体に淡紫紅色を帯び、葉緑素がない。地上の茎は短くほとんどが地下にあり、高さは15~30cmである。8~9月頃、葉腋から長い花柄を出し、淡紅紫色で筒形の花を下向きにつける。花冠の長さは3~3.5cmで先端は5裂し、果実には10万粒もの種子が含まれている。この種子は黄な粉のような粉末で、キノコの胞子に近いものである。和名の由来は日陰で根に寄生して、うつむきかげんに咲くところから、男女関係に思い悩む美人に見立てたものである。別称としてキセルソウ、ナンバンギセル、オランダギセルなどがある。桃山時代に南蛮船によって、喫煙道具が日本に持ち込まれると、花の形がパイプに似ていたために名付けられたもので、オモイグサよりこちらの方が親しみ深い。学名は『*Aeginetia indica*』で、属名は7世紀のギリシャ人の医師P.アエギネタの名に因む。種小辞はインドのという意味で、中国での呼称は『野菰』である。

オモイグサは古くは『万葉集』にも登場し、

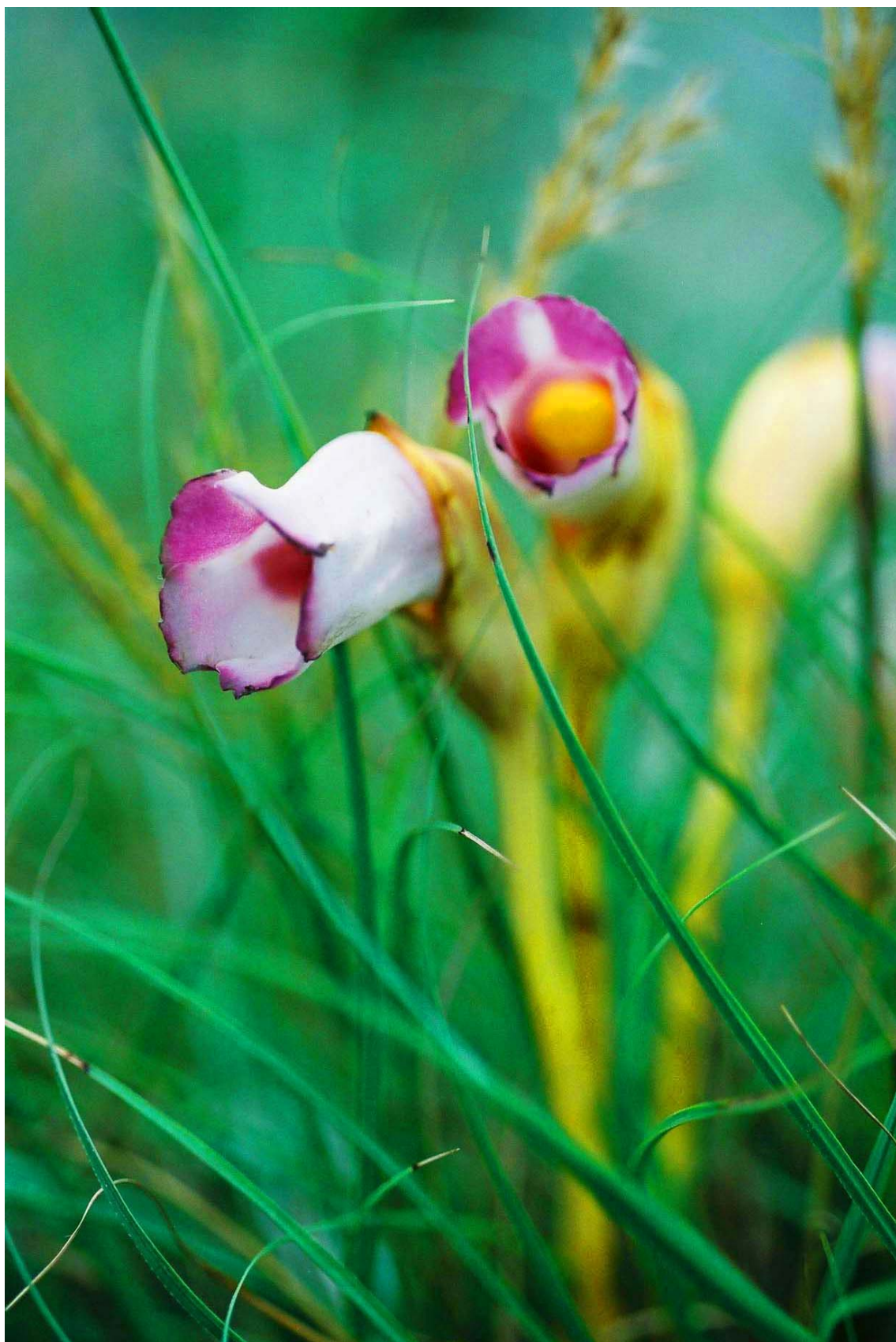
道野辺の尾花が下の思い草 今さらになぞものか思はむ

と詠まれており、その意味は、思い草が道野辺の尾花に頼って生きているように、私はあなただけを頼りに生きているのですから、今さら何も思い悩むこともないのですが…。と言っているのである。それにしても万葉時代にオモイグサがオバナに寄生することを理解していたところがすごい。よく目立つ花だったから、じっくりと観察を重ねた万葉人がいたのだろ。全草を乾燥させたものを煎じて、のどの痛みに服用する。

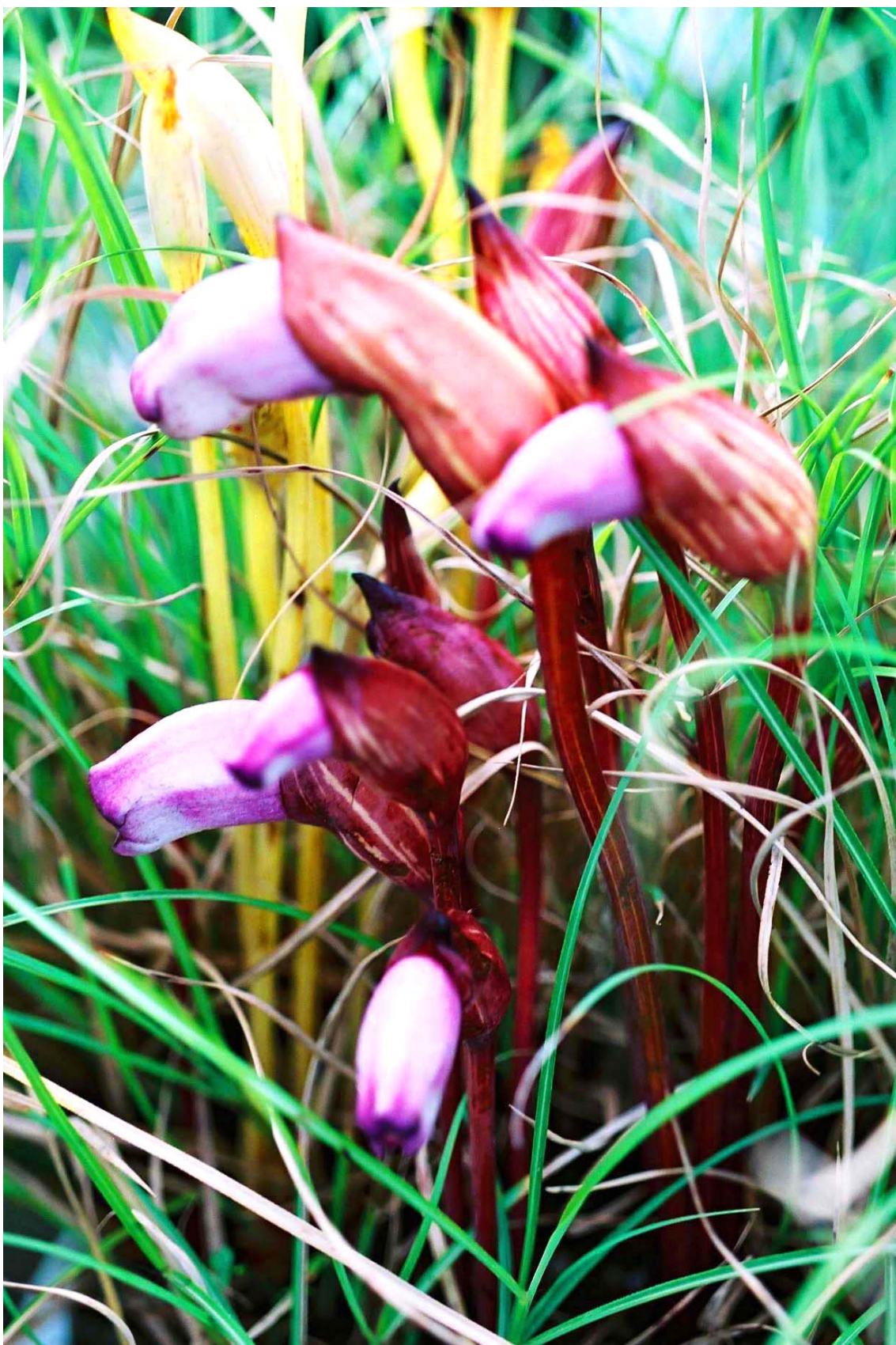
オモイグサとよく似た寄生植物にギンリュウソウがある。イチヤクソウ科の多年草で、日本各地の山林中に堆積した落葉などに生える。高さは約10cmほどで、葉緑体を欠き、根塊以外は全て白色の半透明で、5~8月ごろに開花する花も、鱗片状で互生する葉も白色の半透明、果実も白い。このため別称はユウレイソウとかユウレイタケ、ユウレイバナ、コケノユウレイなどとも言われている。学名は『*Monotropastrum globosum*』、属名は『*Monotropa*』属に似たという意味である。では『*Monotropa*』属はというと「monos=一方向」「tropos=傾く」との合成語で、花が下方向を向いて咲くことに由来する。また種小辞は球形のという意味である。ギンリュウソウはベニタケ属の菌類と『菌根』を形成し、そこから養分を得て生存する。つまり表面的にはベニタケ類に寄生する形になっている。しかし実はベニタケ類も森林中の樹木類に寄生しており、樹木が作り出した養分を、ベニタケ経由で供給されて生存しているのである。もともとの樹木からすると、ベニタケ類に寄生され更にギンリュウソウに寄生されていると言う複雑な関係になっており、ギンリュウソウはいわば孫亀みたいなヤツなのである。



オモイグサは、美しい女性が恋に思い悩む姿に例えたともものだという(栽培品)。



確かにキセルによく似た形をしており、サトウキビやススキなどに寄生する(栽培品)。



こんなに群れて咲き宿主を枯らしてしまうことも少なくない(栽培品)。



オモイグサに似たギンリュウソウは、別名ユウレイタケともいう(長野県軽井沢町)。



ギンリュウソウは雨の多い季節に、地面から急に姿を現す。このため別称はユウレイタケとなっているが、地上に顔を現す頃はこのようにぼろぼろになっていることも多い。過去10年間でまだ2度しかお目にかかったことはなく、そういう点ではラッキーだった(長野県軽井沢町)。 [目次に戻る](#)